

「自然」を身近に感じるための製品開発

Product development to feel close to nature

木下シエナ¹⁾

指導教員 坂元愛史¹⁾

研究協力者 節句田恵美²⁾, 岡澤立夫³⁾, 花活布プロジェクト

1) サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 インテリア・家具研究室

2) (株)SEC DEN

3) 東京都農林総合センター

キーワード：自然離れ, IKEA 効果, 植物, 花苗, 室内

1. 研究背景

自然(植物)は人の生活環境や精神状況に良い影響を与えることが従来の研究から判明している。しかし生活環境が著しく変化する現代社会において都市部ではとくに自然に触れ合うこと自体が困難となっており自然体験経験者は減少傾向にある。このような自然離れを「経験の消失」⁽¹⁾といい、それによる健康・複利の劣化や環境保全意識の低下等が問題視され、自然体験の大切さが唱えられている。しかし、文部科学省の調査「義務教育に関する意識調査」⁽²⁾による「小学生の子どもを持つ親が家庭教育で心がけていること」17項目の中で「モノづくりや自然体験の機会を作る」ことに対する親の意識は二番目に薄い。

2. 目的

生活空間で自然に触れる機会をつくり関心を持たせる有効な方法として花苗に注目し、なかでも最適と思われる「花活布」(布で育てる室内鑑賞用生花、産官学連携で研究開発中)を取り扱う。本研究の目的は、植物に触れる体験も含めた「花活布」の新たな販売方法の提案をすることである。

3. 調査

生活空間に自然を取り入れるには「本物の(生長している)植物」を取り入れることが好ましいだろう。現在の主な方法として、鉢植え・切り花等が挙げられるが、より自然のカタチに近い手軽なものとして「花活布」に着目した。

竹内⁽³⁾の先行研究では、花活布をブランディング化、その概念を確立し、主な客層を調査、販売のための媒体・展示を提案した。しかしながら、販売店に置いてもらいにくい「売り方」等の課題が残っており改善の余地があるだろう。

3.1 現在の販売方法の主な課題

現在は農家でのポリポットによる育成後、店頭で布に移しプラカップを用いたパッケージで販売。

- ① 布へ移すことでその劣化が始まり、販売までのタイムラグが長いと傷みが大きくなる
- ② 布へ移す作業は生産農家で行うにしても販売店で行うにしても負担とコストがかかる

4. 仮説

ポリポットから布に移すタイミングをユーザーの購入後に変更することを検討した。これにより販売前の布の劣化が防げるだけでなく、自らつくることにより完成された製品よりも価値を感じる「IKEA 効果」⁽⁴⁾により「花活布(植物)」への関心と愛着を高められるのではないだろうか。

4.1 仮説の検証

購入者自身が好みの苗と布を選び、苗を布ポットに移し変える作業を自ら行う「花活布製作体験」ワークショップを提案。事前検証として30～70代男女4名の体験を実施。選んだ苗と布を使用し完成させるための「作り方説明書」の必要性を感じ作成した。

はなかつぶ 花活布の包み方



図2 作り方説明データ

第2回昭島矯正展(9月)にて、2日間ワークショップを開き(一個500円)体験販売した。

5. 結果と考察

1日目58個、2日目41個を売り上げた。この販売実績は過去最大級であった。隣のブースで全く同じ種類の苗が1/10の価格(50円)で売られる状況の中、約100個を売上げた。



図1-1、図1-2 花活布製作体験の様子

従来の主な客層(中年女性)以外の、子連れ客や若者等にも受け入れられ、初日の購入客が2日目に「友人と一緒にやりたい」と作業前のものを複数買って行った。ワークショップで「体験を得た」ことで、花活布の価値や特性を知り「植物に直に触れ自らつくる楽しさ」を味わい、「友人に薦めよう」「プレゼントしよう」と思ったのではないのだろうか。体験者の感想に「楽しい」「自分でつくと愛着がわく」等、肯定的な言葉が多かったことから、その体験には「IKEA効果」⁽⁴⁾があることも検証できたと考える。

6. 提案

検証結果より、ポリポットから布に移すタイミングをユーザーの購入後に変更することは販売者側、購入者側双方に利点があると考えられる。そこ

で、新たな販売方法として『苗と布を店頭で選んでもらい、家で作るキット』に展開していくことを提案する。

6.1 具体案

今回の結果をふまえたうえで以下を作成し、新たな花活布の売り方を提案する。

- ① 購入者が自ら布に移すための「作り方説明書」
- ② 苗、布、説明書等すべてをセットして入れるための「新花活布パッケージ」(製作体験時の汚れ防止にもなる作業スペースを兼ねた紙袋一体型)



図3 「新花活布販売用パッケージ」試作

- ③ 現パッケージの利点である給水機能を維持するためのツール開発

7. 今後の展開

「花活布製作体験」後に花活布を飾っている人から「癒される」といった声を多く聞く。その特性から、「作業療法」としても活用することが出来るのではないかとと思われる。

8. 参考文献

- (1) 曾我昌史・今井葉子・土屋一彬(2016)「経験の消失」時代における自然環境保全 人と自然との関係を問い直す
- (2) 文部科学省「教務教育に関する意識調査(平成17年度)」
- (3) 竹内美樹(2017) 研究的な取り組みをデザインの力で社会とつなげる
- (4) The "IKEA Effect": When Labor Leads to Love Michael I. Norton Daniel Mochon Dan Ariely Working Paper(2011) HARVARD BUSINESS SCHOOL
- (5) 節句田恵美: 破棄制服素材の資材化に関する研究、岩手大学大学院連合農学研究科 生物資源科学専攻、2014-03-24
- (6) 岡澤立夫: テーブル花マットの開発と利用、東京都農林総合研究センター 園芸技術科 花き研究チーム、2014